

カンファ・ツリーの声に耳を澄ます



西本照真（にしもとてるま）

武蔵野大学学長。一九九四年に東京大学大学院人文科学研究科印度哲学専攻博士課程を単
位取得後退学。一九九六年に博士（文学、東京大学）。一九九七年に武蔵野女子大学（現
武蔵野大学）文学部人間関係学科専任講師に就任。武蔵野大学附属幼稚園長、学校法人武
蔵野大学理事、武蔵野大学人間関係学部（現人間科学部）学部長、同大学大学院仏教学研
究科長等を歴任。著書に「三階教の研究」「華厳経」を読む」等多数。

プロローグ

大いなる武蔵野の荒野にまかれし 小さき一粒の種¹
悠久の時を経て 長期思考のゆりかごたるカンファ・ツリー^{here}
幾世代も連なりゆく 生と死の営みを見守り続けてきた
カンファ・ツリーは これまで静かに口を閉ざし
言葉によって紡ぎ出される
尽きることのない世界の虚構性を見つめ続けてきた

そして 言葉が生み出してきた 虚構世界の
極限状況へのカウントダウンを前にして
はじめて口を開いた

真実の世界に生きたい
真実の言葉に出会いたい
真実の言葉を届けたい
その思いに突き動かされ

月の光に照らされて
言葉を発する勇気を得て
口なき口を開いた

この果てしない あるがままの世界に息づく すべての命あるものの
安らげきいのちの誕生 安穩なる生の営み 安樂な死の憩いが
永遠の未来に向けて 連綿と流れゆくことを願って

カンファ・ツリー・ヴェレッジへようこそ

カンファ・ツリーを囲んで、いのちといのちがつながりあう村、カンファ・ツリー・ヴェレッジ。この村では、すべてのアクションは耳を澄ますことから始まる。刹那、刹那に感覚器官の一々を通して伝わり来るものに耳を澄ますのではない。挙体全収。まるごと体全体で、一本一本の毛穴をすべて開き放って、世界の声に耳を澄ます。声なき声、名もなき世界のありのままの声に耳を澄ます。無名相法、断語言道。

耳を澄ますとは、問う営み。自己と世界を問う。自己を問い、世界を問うので

はない。自己が世界を問うのでもない。すべての毛穴を開いて、自己と世界のかわりを問う。

言葉は意地悪である。世界を対象化した瞬間に虚構が始まる。しかし、大いなる智慧は、その虚構を虚構として気づきながら、懸命に真実を描き出してきた。まるごと体感される自己と世界の真実を、言語化の極みにおいて「縁起」という言葉が生み出された。真実ありのままの世界を、分別された言葉を通じてしか納得できない我々に、究極の言葉の名乗りを上げて²。

耳を澄ますというのは、humble（謙虚）な営みである。セルフセンターな世界は本来的に成立しえない。なぜならセルフをセンター化することは、自己のいのちの毛穴を閉じてしまうことになるから。融通無礙な世界とのかかわりなくして自己は成立しえない。

カンファ・ツリー・ヴィレッジに集い

耳を澄ます

毛穴を開く

自己と世界をまるごと問う

Be Humble !

カンファ・ツリーとは、悠久の時の流れを象徴する木である。よりよき世界を願い、自己と世界を真摯に問うてきた祖先の象徴である。よりよき未来を願い、現在を懸命に生きる者たちの止まり木である。未来の世界に生まれいづるものにとつては、名もなきいのちの声に満ちた貯水木である。

ヴィレッジに響流する大いなる問い³

生きとし生けるものにとつて

心安らぐ家となるとは、どのようなことでしょうか

安心して帰り行くとは、どのようなことでしょうか

道しるべとなるとは、どのようなことでしょうか

闇を照らす明かりとなるとは、どのようなことでしょうか⁴

カンファ・ツリーの葉が風にそよぎ、問いを発し続ける。真実に向き合おうとする問い。自身の人生の歩みを見つめ続けようとする問い。問いに謙虚に耳を澄まし、歩み続けてきたよき祖先の声にも導かれながら、村人たちは謙虚にひたむ

きに生きてゆく。

カンファ・ツリー・ヴィレッジは、問いと願いが十方に響流し、はてしなき世界が開けゆく場。問い、考動し、カタチにし、見つめ直すパイラルの象徴的な集いの場。へだてのない智慧と慈悲に導かれ、先人たちの願いに耳を澄ましながら、ともに歩み続ける。

あるがままの世界に耳を澄ます

我々によって感覚され、認識され、言語化される手前の、ありのままの世界、それを無分別の世界と呼ぼう。対象化されていない、世界それ自体。その無分別の世界も、言語によって二元化され、対象化されると、あらゆる欲望と執着を生み出すマグマとなる。

始まりなき宇宙の営みのすべてが、今という瞬間とそこに縁起連関的に存在する一切を成り立たしめている。あらゆる事象の生成、変化、消滅のすべてを寸分の違いもなく引き受けた時、今、この瞬間の宇宙があり、また無限の縁起的連関の結び目に自己がある。宇宙全体の時間的、空間的な一大縁起、エネルギーの離

合集散の営み、壮大なる交響楽の世界が奇跡的に存在している。その一大交響楽の世界を鑑賞する言語という虚構化の試み。分別された世界の誕生。

目の前を飛ぶ小さな名もなき虫が一匹、顔面をしきりに周回し、我が思考を分断する。その虫は言う、私があなたの思考を分断しているのではない。あなたが、私のあるがままに飛ぶ世界を分断しているのだと。世界を分断し、益と無益、利と不利、用と無用へと二分化してゆく。本来、邪魔者などどこにもいないのに。

いつの間にか、小さな虫はいない。先ほどまであれほど分断され続けた世界が、自ずと静まっている。あるがままの世界を分断したのは、いったい何だったのか。

ゴータマ・ブツダの出現以降、二五〇〇年余りにわたって、ブツダの目覚めた真実（ブツダ・ダルマ）、分別されないあるがままの世界を言語という薄氷を渡るアプローチ、言説の極み、言によって言を棄てていく試みがなされてきた。その時々

に発しうる究極の言語によって。
縁起の世界観は、私自身の苦しみの生起に関して明らかにされた。「これあれば、彼あり」（Aという原因によってBという結果が生じる）は、欲望・怒り・無知などの煩惱によって苦しみが生じることの基本形としての表現であった。逆に、「これなければ、彼無し」（Aという原因が滅すればBという結果も生じない）という

苦しみの断滅に至る道しるべともなる。

しかし、AからB、BからCという玉突き的な縁起の説明は、A、B、Cという要素を實體視することによって、さらにまた、A、B、Cを構成する諸要素を實體視することによって、あるがままの世界の把握とは裏腹に新たな分別を生じた。この真理把握の逆流現象を、いま一度リアルな、あるがままの世界把握に立ち戻るための思想装置が「空」思想であった。AもBもCも独存の要素として他から区別されたものは、どこにも存しない。存在のありのままを解き放ち、玉突き的で直線的な縁起観から解放されて、無数の存在が閉じた存在としてではなく、相互に関係しあって共存している。一即一切、一切即一。響き合い、つながり合うありのままの世界を懸命によみがえらせる言語的営み。

へだてなき他者の声に耳を澄ます

あるがままの世界、真実の無分別の智慧の世界にふれた者が、へだてなき慈悲の言葉を開いていく。

いかなる生物生類であっても、怯^{おび}えているものでも強剛なものでも、悉^{しつこく}く、長いものでも、大きなものでも、中くらいのものでも、短いものでも、微

細なものでも、粗大なものでも、目に見えるものでも、見えないものでも、遠くに住むものでも、近くに住むものでも、すでに生まれたものでも、これから生まれようと欲するものでも、一切の生きとし生けるものは、幸せであれ⁵。

ありのままに目覚めたものの願いは対象を選ばない。この世界に存するあらゆるもの、今後存するであろう一切の生きとし生けるものにも、あまねく「幸せであれ」の願いがかけられる。大・小、遠・近、見・不見、生・未生。いかなるものもへだてなく、対象によって差別することなく、平等に幸せを願う。

広がりゆく慈悲は、生きるものへ、生けるものを構成する要素へ、死せるものへ、水へ、空気へ、瓦石へ。ブッダ・ダルマに目覚めたものは、集合体としての衆生、それを構成する要素、そのような対象化から自由になり世界と一体化する。何事も対象的な思惟分別・執着を離れているという点で畢竟空であるから、対象化しないという点で無縁である。目覚めたものの慈悲をブッダの眼と名づける。この眼によって対象化される存在はなく、対象化して見たり・聞いたり・知ったり・認識したりすることはない⁶。

ブッダ・ダルマにもとづく慈悲は特定の対象に限定して注がれる愛情を超え、

無差別平等、無執着においてなされる身体的、言語的、心理的活動（身口意の三業）の全般にかかわる他者との関係性の活動といえる。大慈悲心は大いなる願いの心であり、誓願が完成されたところに開けゆく無分別なる慈悲の心である。

ダーナ&アヒンサー

カンファ・ツリーの声が響き、耳を澄まし問うていく営みとダーナ^施&アヒンサー^{不殺生}という行動していく営みが一体となっていく。ブツダ・ダルマの智慧と慈悲に耳を澄まし、ダーナとアヒンサーを行動変容の力としていこう。よき祖先は、今の時代を生きる私たちに、無分別智としてのブツダ・ダルマを言語化して送り届けてきた。動植物や地球環境を世々生々に慈しみ今日に送り届けてきた。よき祖先となるために、我々は何を未来に伝えていくことができるだろうか。ダーナの営みが問われる。

ブツダ・ダルマの智慧と慈悲に耳を澄ますとき、聞こえてくるのは一切の生きとし生けるものや環境世界が相互連関の中で縁起している事実である。その世界を自己中心に閉じていこうとするはからの姿である。そのような自己を世界の開けに参加させていく行動装置としてのダーナとアヒンサー。

ブツダ・ダルマは無分別なるものであるが、我々分別の世界に生きるもののため、方便によって言語化され、無分別の智慧と慈悲が縁起・空・無自性という言葉の極みによって名乗りをあげ、他者と関わり続ける最良の手段としてダーナとアヒンサーの行動をいざなっている。自己が本当に自己たりうるためには他者とかかわる以外にはなく、他者とよりよくかわるためにはダーナとアヒンサーという行動原理に照らして自身の行動を整えていく以外にはない。

ダーナに生きる

縁起と慈悲にもとづく第一の行動原理としてのダーナ（布施）

眞実を求めて生きるものには、まことにダーナが歓喜の実践となつてその人を育ててゆく。大いなるダーナの実践者となり、自己と自己に属すると思ひ込んでいるあらゆるものを手放していくのだ。分け隔てなく、すべての生きとし生けるものに、恵み施していくのだ。ダーナには、後悔もなく、見返りを求めることもない。名誉や利益も期待しない。ただひたすらに、すべての生きとし生けるものを、救い護り、おさめとり、そのものの生きる力となつていく、そのような根っこのような願いを抱いて、ダーナを実践していく⁷。

真実を求めて生きるものは、ダーナを行うもの、ダーナを受けるもの、渡されるもの・ごと、ダーナという行為、ダーナという結果、ダーナを行うことによつて言語的に成立するあらゆる二分化された営みから自由になる。

よき祖先から伝えられたダーナに思いを馳せ、カウントしてみる。動物も植物も大地も自然も、そのものが生まれ、死んでいったこと自体が大いなるダーナであった。そしてまた、それらの営みを無駄にせず、破壊せず、枯渇させず、大切に今日に伝えてきたよき祖先の営みもダーナであった。今日、享受している一切が、このうえ無きダーナとして立ち現われてくる。

長き人類の歩み、その中で繰り広げられてきた戦争も平和も、略奪も譲渡も、今に生きるものが歴史に意味を問うならば、ダーナとして立ち現われてくる。およそ、人類が積み上げてきたあらゆる思想、宗教、文化、芸術、政治、経済、教育、生産、あらゆる活動が、今に生きるものが意味を問うならば、目覚めをうながすダーナとなる。

未来を生きるものに、今を生きるものが与えうるダーナ、それは未来の生きものにとつて単に意味として成立しうるダーナであつてはならない。未来の生きも

のが、生存しうる世界自体をまずは残す営みを起こす必要がある。今を生きるものがなしうるダーナは、その意味で、過去に生きたものが今に生きるものに与えるダーナとは、質を異にしている。

未来を生きるものが我々に与えるダーナは何であろうか。

欲望に駆られて暴走しようとする時に、無言のブレーキがかかる。それが未来から与えられるダーナである。暴走しないように、暴走しないように、慎み深く生きようとする思いが目覚める時、それは未来から贈られるダーナである。

アヒンサーに生きる

未来の世界に向けて、他者に開かれていくもう一つの行動原理はアヒンサー（不殺生）

真実の智慧と慈悲に満ちたブツダは、アヒンサーについて次のように語る。

すべての者は暴力におびえ、すべての者は死をおそれる。己が身をひきくらべて、殺してはならぬ。殺さしめてはならぬ。すべての者は暴力におびえる。すべての（生きもの）にとって生命は愛しい。己が身にひきくらべて、殺し

てはならぬ。殺さしめてはならぬ。

生きものを（みずから）殺してはならぬ。また（他人をして）殺さしめてはならぬ。また他の人々が殺害するのを容認してはならぬ。世の中の強剛な者どもでも、また怯えて（おび）ている者どもでも、すべての生きものに対する暴力を抑えて――¹⁰。

宇宙の開闢（かいびやく）以来の今のいのちであるがゆえに、その奇跡性に鑑（かん）み、今、向き合ういのちを相互に尊重し、生かし合おう。「不殺生なる生き方」は、グッド・アンセスターとなるための生き方である、未来の生者を生み出さしめ殺さないための生き方である。同時に、過去に生存し、無辜（むこ）なるものとして殺されたグッド・アンセスターたちの、無数のいのちの声を無駄（むだ）にしない生き方でもある。わがいのちをわがいのちたらしめた限りなきいのち。また、グッド・アンセスターたちの死を悼む心でもある。今、この瞬間にいのちを共にするものに対する不殺生なる生き方であることは言うまでもない。

カンファ・ツリーの葉（は）がそよぐ。

他者の命の暴力的略奪、苦しみの暴力的施与、自己の欲求の暴力的充足から離れ、

身をつつしみ（物理的暴力への決別）、ことばをつつしみ（言語的暴力への決別）、心をつつしめ（心理的暴力への決別）。

アヒンサー（不殺生）という行動原理は、不偷盜ふちゆうとうへとつらなっていく。

教えを聞く人は、与えられていないものは、何ものであっても、またどこにあっても、知ってこれを取ることを避けよ。また（他人をして）取らせることなく、（他人が）取り去るものを認めるな。なんでも与えられていないものを取ってはならぬ¹¹。

真実を求めて生きるものは、あらゆる生きとし生けるものの命を殺すということをや遠ざけ、離れ、あらゆる武器を棄て去って、敵というラベルをはがして、いかり・恨みの心を収め、生きている存在を二度と元に戻らぬ死という在り方に強制的に至らしめることに、凍り付くような恐怖心と申し訳なきを感じ、生きとし生けるものに慈悲の心を起こして、常に相手にとって安楽なことを求めて、さらに悪しき心で衆生を悩ませるようなことはしない。ましてや、害を加えるということは、もつてのほかである¹²。

大いなる無分別の世界に憩こゝろどう渾沌こんどんという帝王が、分別をこよなく愛する北と南

の帝王を招いて歓待した。無分別の世界で悠久の時に憩った北と南の帝王は、何かよい返礼はないか、相談した。渾沌という存在は感覚器官を備えていない。穴を開けて差し上げよう。目の穴、耳の穴、鼻の穴、口の穴、一日に一つずつ穴を開けていった。七日の間に穴を開け終わった。渾沌は息絶えていた¹³。

北と南の帝王の営みはダーナか殺生か。人類は、自身にとってよかれと思ひ、快適、利便、繁栄、正義、綺麗など、美しき言葉の煙幕を張り巡らして、取り返しつかない無数の穴を開け続けてきた。飢餓、貧困、格差、差別、戦争、地球環境の悪化、資源の枯渇、希少種の絶滅。分別を生み出すための感覚器官を一切持ち合わせていない混沌に、良かれと思つて五感に通じる穴を開けた北と南の帝王。息絶えていた渾沌の声に耳を澄ます。

ひたすら耳を澄まし、聞き続けるしかない。死にゆく者、死せし者の声を聞き続けるしかない。動物も植物も含めて生きとし生けるものを決して殺さないということは、生きていく限りはありえない。むしろ他者を殺し、投げ出された他者の命によつて成り立っているこの私の生命の現実。他者の命の存続と自己の命の存続が相反する命の現実。しかし、殺さないでくれという声なき声を聞き続け、完璧な不殺生では生きられない自己の姿を問い続け、死にゆく者の叫びに耳を傾

け続け、不殺生に向けて少しでも歩んでいこうとする誓い。少なくとも人間同士の殺生は人間の生存を成り立たしめるための不可欠な殺生ではない。であるならば、最低限の行動原理とするべきではないか。カンファ・ツリーの叫びが聞こえる。

エピソード

武蔵野の荒野にそびえる　カンファ・ツリー

若きいのちの発現を　見守り続けて百年

何よりつらかったのは　乙女たちの散華¹⁴

無念を伝え　二度と繰り返さない

永遠に語り継いでいこう

真理の荒野に学ぶものよ

無分別の智慧と慈悲に導かれ

ダーナとアヒンサーに生きるという問いに

耳を澄ませながら

【真理の荒野】

花びらをあびて 真理の荒野をすすむ

今のひとときを おごそかに

わが生涯の 重みとして

若きいのちを ささげよう

真実（ほとけ）のみちに いつまでも（山田龍城作詞）

学校法人武蔵野大学の百年の歩みにおいて、とりわけ悲しい出来事として思い起こされるのは三つの出来事である。一つは、武蔵野女子学院が開設される前年、一九二三年九月一日に起こった関東大震災、二つには、第二次世界大戦中の一九四四年十二月三日、武蔵野女子学院高等女学校の生徒四名が武蔵野キャンパスに投下された爆弾によって尊い命を散華したこと、三つには、有明キャンパスが開設された二〇一二年の前年、二〇一一年三月十一日の東日本大震災である。

二〇二四年、創立百周年を迎え、さらに二二二四年に向けて新たな百年を歩む中で、予期しない苦難も待ち受けていることであろう。その時々、ブツダ・ダルマは必ずや寄る辺となることであろう。ブツダ・ダルマが名乗りを上げて、苦海に沈む我々の道しるべとなることであろう。

1 学校法人武蔵野大学は、一九二四年、世界的な仏教学者高楠順次郎博士によって、東京の築地本願寺の境内に武蔵野女子学院として創設された。爾來、百年にわたって仏教精神に基づく人格育成を建学の精神として教育活動を展開してきた。一九二九年には、武蔵野キャンパスへ移転。武蔵野の面影を残す武蔵野キャンパスの東側に、かつて学祖も住まわれていた紅雲台があり、その前に樹齡百年余りと推定される一本のカンファ・ツリー（楠）がそびえている。このカンファ・ツリーは、百年にわたってブツダ・ダルマ（ブツダの目覚めた真実）に基づいて育ちゆく若人の歩みを静かに見守り続けてきた。

2 大乘仏教の綱要書として東アジア世界を中心に重用されてきた『大乘起信論』では、真実のあるがままの世界（真如）と言語との関係について次のように説いている。「一切の法は本よりこのかた、言説の相を離れ、名字の相を離れ、心縁（心が対象とする）の相を離れ、畢竟平等にして変異あることなく、破壊すべからず、ただこれ一心なるがゆえに真如と名づく。一切の言説は仮名にして実なく、ただ妄念に随がうのみにして不可得なるをもつてのゆえに、真如と言うもまた相あることなし、いわく、言説の極、言に因りて、言を遣るなり」（大正大蔵經三十二卷、576上）

3 『仏説無量寿經』に「正覺大音、響流十方」とある。ブツダの目覚めた真実と

願いの大音が、十方に響きわたっていく。

4 『華嚴経』「浄行品」の次の問いを参照。「云何が菩薩は衆生の舍（いえ）となり、救となり、帰となり、趣となり、炬（たいまつ）となり、明となり、灯（ともしび）となり、導となり、無上導となるや」（大正大蔵経九卷、430頁中）

5 『ブツダのことば スッタニパータ』「第一 蛇の章 八、慈しみ」（中村元訳、岩波文庫、37頁）

6 『大智度論』第四十卷では、三つの慈悲について次のように説いている。「慈悲心に三種あり。衆生縁（衆生を対象とする小悲）・法縁（存在の構成要素を対象とする中悲）・無縁（何事も対象化しない大悲）。凡夫人は衆生縁。声聞・縁覚・菩薩は、衆生縁の後に法縁。諸仏は、善く修行すること（何事も対象的な思惟分別・執着を離れているという点で）畢竟空であるから、（対象化しないという点で）無縁。だから、仏の慈悲はまた仏眼と名づける。すでに仏眼について説いたので、今は仏眼の用いる所について説こう。この眼は、（対象化した）法は無く、（対象化して）見たり・聞いたり・知ったり・認識したりということはない。」（大正大蔵経二十五卷、350頁中～下）

7 『華嚴経』「十行品」に、布施について次のように説かれている。「何等を菩薩摩訶薩の歡喜行と為す。この菩薩は大施主となり、ことごとくよく一切の所有を捨離し、等心に一切の衆生に恵み施す。施しおわりて悔いること無く、果報

を望まず、名誉を求めず、勝処に生まれんことを求めず、利養を求めず。ただ一切の衆生を救護せんと欲し、一切の衆生を撰取せんと欲し、一切の衆生を饒益せんと欲し、一切の諸仏の本行を学ばんと欲し、正しく諸仏の本行を憶念せんと欲し、清浄なる諸仏の本行を得んと欲し、諸仏の本行を受持することを得んと欲し、諸仏の本行を顕現せんと欲し、広く諸仏の本行を説かんと欲し、一切をして苦を離れ樂を得しめんと欲するなり。これを菩薩摩訶薩の歡喜行と名づく」(大正大藏經九卷、466頁下)

8 『華嚴經』「十行品」には次のように説かれている。「菩薩はかくのごとく觀する時に、施すものを見ず、受くる者を見ず、財物を見ず、福田を見ず、業を見ず、報を見ず、果を見ず、大果を見ず、小果を見ざるなり」(大正大藏經九卷、467頁上)

9 『ブツダの真理のことば』「暴力」(中村元訳、岩波文庫、28頁)

10 『ブツダのことば』「スッタニパータ」第二 小なる章 一四、ダンミカ」(中

村元訳、岩波文庫、81頁)

11 『ブツダのことば』「スッタニパータ」第二 小なる章 一四、ダンミカ」(中

村元訳、岩波文庫、82頁)

12 『華嚴經』「十地品」には次のように説かれている。「一切の殺生を遠離し、刀杖を捨棄し、瞋恨の心無く、慚あり愧あり、一切衆生において慈悲心を起こし、

常に樂事を求め、なお悪心もて衆生を悩まさず、何ぞいひ沉んや害を加えるをや」(大正大藏経、548頁下)

13 福永光司『莊子 内篇』(中国古典選十二、朝日文庫、337～340頁)参照。
14 武蔵野女子学院高等女学校の生徒であった赤沢ミヨ、小林りつ子、斉藤昭子、中根尚子の四名が、第二次世界大戦中の一九四四年十二月三日、武蔵野キャンパスに投下された爆撃によつて尊い命を散華した。